【研究主題】　アントレプレナーシップの醸成を図る地域と関わる活動について
【副題】　ひまわりプロジェクトの活動を通して

【学校・団体名】　横手市立浅舞小学校
【役職名・氏名】　校長　小坂　靖尚

１．はじめに

本年度、創立１５０周年をむかえた本校であるが、１０年前２６４名であった児童数が２２４名にまで減ってきている。さらに、本学区域で昨年度出生した子の人数は７名、その子どもたちが１年生として入学してくるときには本校の全児童数は１２４名と、今後の児童数の減少は１０年を待たずして１００名の児童が減るという加速度的な児童数減少状態となっていく。このように、少子化が著しく進むこの地に暮らす子どもたちは、自身の郷土を持続可能な地域社会としていくために、地域のよさを自覚しつつ、地域の課題と正対し行動を起こさなくてはならない時代を過ごすことになる。子どもたち一人ひとりの将来に課せられた役割は、現在とは比較にならないほどの重さである。公共性に照らし合わせ自ら行動できる「自律性」、信念に基づいて主体的に自らの道を切り開いていくことができる「自立性」、を持ち合わせた確立された個であることがより求められる。新しいことに立ち向かう、地域の課題解決に向け取り組めるそのような力となるであろうアントレプレナーシップの醸成を目指した活動を進めていくことの必要性を感じ、従来からあったひまわりプロジェクトを改革することとした。

２　活動の改善に至る経緯と活動の目的

ひまわりプロジェクトとは本校において、５年生を中心に全校体制で、１４年前から取り組んでいる活動である。ひまわりを育て、ひまわりの種を採取し、その種から搾油しひまわり油を作り、ひまわり油を販売するという活動を柱とし、それに関連した教科等の学習活動や地域との連携した活動を１年間通して行うものである。これらの一連の活動は、勤労や社会貢献の価値や喜びを味わわせるとともに、自然や地域の人々のよさを感じる活動として一定の成果を収めてきた。しかし、イベント性としての面白さが先立ち、活動に見合った力を十分に育てていないのではないかという課題も見られた。そこで、これまでの活動を踏まえながら、アントレプレナーシップ教育の視点を取り入れるとともに、コミュニティ・スクールの機能を生かした地域と協働する活動となるように改善し進めることとした。

改善の視点

・子どもたちが起業家としての意識をもって活動できるようにすること
・コミュニティ・スクールとして、地域を巻き込み、地域と協働する活動とすること

活動の目的

ひまわり栽培、絵画制作、収穫、ひまわり油づくり、他校や地域機関との連携など、ひまわりを通じた人と関わる体験活動を通し、自然や地域の人々のよさを感じ、ふるさとを大切にする心情を育てるとともに、勤労の価値や喜び、起業家精神の醸成、社会貢献意識を育むことでキャリア発達を促す。

３　本実践の実際

（１）出資に向けたプレゼンテーション

これまで、子どもたちは教師側が立てた計画に基づいた活動をただこなすだけであった。そこで、まずは本プロジェクトを実施するにあたってその資金をどのように調達するか、子どもたち自らが考えるところからスタートさせた。そこで、本活動の中心となって進める５年生に、どのようにしてひまわりプロジェクトの資金を調達するか話し合ってもらうことにした。子どもたちの話合いの結果、協力してくれる方に本プロジェ

出資のためのプレゼンテーション

クトについて説明し、出資してもらうことにしようということになった。子どもたちの中には、融資の方がいいのではと言う意見もあったのであるが、自分たちの活動を応援してもらうという意味から、出資してもらう方がいいのではという意見に落ち着いた。

６月に協力者に向けたプレゼンテーションを実施した。事前に、子どもたちは予算案の作成や活動の概要の説明、融資に対するお礼、株券の作成、当日の協力者への接待、想定される質疑に対する回答の準備等をそれぞれ分担して行った。プレゼンテーション当日は、協力者のみなさんに子どもたちの考えを慎重に審議してもらった。出席者からは、鳥による食害での収穫量の減少にどう対応するのか、地域にどんな思いを伝えるのかなどについて質問があった。また、予算案ではひまわり油の収益が少なく、最初から赤字になるような予算では企業だったら立ち行かなくなるといった厳しい意見もいただいた。子どもたちにとっては大人たちの意見に終始緊張であった。しかし、無事に出資しても大丈夫であるという意見をいただき子どもたちから大きな拍手があがった。（実施初年度ということもあり、資金は学校側で準備をし、協力者にプレゼンテーションを聞いてもらい、出資の是非を判断し、協力者が出資したという形を取らせてもらった。もちろん、不十分な場合は出資できないという判断もあったことを付け加えておきたい。）

（２）種のプレゼントと協力の依頼

本プロジェクトでの子どもたちの願いであるひまわりを通して笑顔を届け地域の人たちを元気にしたいという思いから、ひまわりの輪が地域に広がっていくようにと福祉施設や保育園、ＮＰＯ法人樽見内地域保全委員会などへひまわりの種のプレゼントと協力の依頼を行った。特にＮＰＯ法人樽見内地域保全委員会では、地域の花壇に植え付ける活動を地域の人たちだけではなく、市内の社会福祉法人の団体の子どもたちとも一緒に行ったことを後日教えていただいた。また、今年度は学校運営協議会委員の方からの「もっと広くこの活動をいろいろな人に知ってもらった方がよいと思う。あやめまつりでひまわりの種を配布してはどうだろう。」というご助言とご協力により、地域行事である「あやめまつり」の開催中の土曜日にメッセージカードを添えたひまわりの種の小袋を配布する活動を行った。子どもたちにとっては、見知らぬ大人に声をかけることは勇気いることであり、なかなか声をかけることを最初はためらっていたところであるが、次第にいろいろな人に声をかけ、会話を交わすことで自分たちの思いが通じることのうれしさを感じ取っていたようである。その他にも、児童会だより等で呼びかけ、学校だけでなく家でも育てたいという子どもについては家庭への種の持ち帰りを行った。

支援学校への種のプレゼント

あやめまつりでの種の配布

育苗ポットへの種の植え付けと苗植え

（３）種まき（育苗）、散水、除草

種まき後の除草作業や散水作業の軽減を図るためにマルチ張りを行っている。例年、学校職員が総出でマルチを張る作業を行っていたが、地域の方々の力を借りて行うことにした。本プロジェクトの協力者にお願いし、マルチ張りを機械でしてくれる方を探していただき、その方に全面的にマルチ張りをしていただいた。

また、前年度、種の植えた段階で鳥による食害にあい、発芽できなかった場所が多く見受けられた。子どもたちは経験を踏まえ、育苗ポットに種を植え、苗として育てた後、畑への植え付けを行うことにした。畑への植え付けの際は、異学年縦割りの班で作業し、上学年が下学年の面倒を見ながら作業することで、リーダーシップ、フォロアーシップが育つようにした。なお、花の収穫活動でも、異学年縦割りの班を活用し、作業を行っている。これらの活動を通して、縦割り班としての結びつきが強くなったとともに、上学年の子どもたちは、下学年の子どもたちの面倒を見る喜びを感じていたようである。

その後、日々の活動として散水や除草を行ったが、マルチのおかげで、例年行っているＰＴＡを巻き込んでの大がかりな除草作業は行わなかった。

（４）ひまわり関連グッズの作成

ひまわり関連グッズの製作

協力者からの、収益を上げる工夫をするようにとの指摘から子どもたちは、ひまわりに関連する製品を作成することを考えた。どんなものをつくったらよいか話合い、地域に伝わる浅舞しぼり、ひまわりをモチーフとしたキーホルダーやブローチ、コースターなどを作ることにし、製作に取りかかった。

浅舞しぼりについては、学校運営協議会委員の方に窓口になっていただき保存会の方々との渉外をしていただいた。保存会の方々から、「浅舞しぼり」という名称での販売については品質上の問題から了承できないが製作については協力したいというお話をいただいた。そこで保存会の一員でもある学校運営協議会委員の方に何度も足を運んでいただき「ひまわりしぼり」というオリジナルの名称で商品化することができた。このような経緯から、子どもたちは商品の品質を高めていくことの重要性について学ぶことができた。また、地域の伝統ある技法に触れ、改めて地域の歴史に誇りをもったとともに、購入してもらえる製品にするために一つ一つ丁寧に仕上げて完成度を高めるよう努めていった。

（５）ひまわり集会とひまわり絵画展

ひまわりプロジェクトに協力していただいている地域の方々を招待し、これまでのご協力に対して感謝の気持ちを伝えるとともに、これまでの活動の実際を紹介する集会を実施した。活動の様子をスライドと寸劇で紹介し、ひまわりに関するクイズなどで協力者のみなさんと全校で楽しむことができた。会を開催したことでそれまでの自分たちの活動を振り返ることができたとともに、活動が自分たちだけではなく、地域の人たちなどの協力してくれる人があって成り立っていることを改めて感じ取ることができた。

ひまわり集会

ひまわり絵画展と審査

また、ひまわり絵画展の開催は、地域の保育園児からもひまわりの絵を描いてもらい学校に展示することで幼小連携を図る一事業とすることができた。また、審査を本プロジェクトの協力者の他、平鹿中学校美術部にも協力していただき小中連携の一助ともなった。

（６）ひまわり油販売

当初２月に予定したひまわり油の販売であったが、製品の納品が遅れたために、３月の販売となった。地元の朝市の一角にスペースをお借りし、店を開かせていただいた。子どもたちとのゲームに参加してくれたお客さんには割引券を配付したり、呼び込みをしたりするなどの子どもたちの販売への工夫もあり、３０分ほどで用意したひまわり油とひまわり関連グッズの一部を完売することができた。どのように商品を陳列したら見栄えがいいのか、どのような順路にすると会計までスムーズに進むのかなど、購買する人の立場に立って考える姿が見られた。

ひまわり油の販売

（7）各教科等への活用

総合的な学習の時間や特別活動を中心に活動を行ってきたが、ひまわりの絵画の製作、ひまわりの種を数えるなど、図画工作や算数などとの関連を図るようにしてきた。各教科との関連を表したのが表－１である。

４　まとめ　～成果（○）と課題（●）～

○子どもたちが企業経営者としての視点からこの活動を捉えるようになった。収穫や収益を上げるための方策を考えることを通して、新たなことに取り組もうというチャレンジ精神、新たなものを生み出そうとする創造性、課題を乗り越えるための探究心などが芽生えてきたように感じられる。

○本活動の中心となって取り組んだ５年生については、表－２に示したように地域のためになる活動を進んで取り組みたいという地域貢献に関する意識の高まりや、普段の生活や社会に出たときに役立つように勉強したいという生活と結び付けたり自身のキャリアの視点から勉強の意義について捉える児童の割合が多くなった。

○ひまわり関連グッズの一つとして地域の伝統工芸である浅舞しぼりの技法を使ったハンカチを製作したが、製作の過程で地域の方々と連携して取り組むことができたとともに子どもたちが地域の伝統工芸のよさを再確認することができた。

●ひまわり油の完成が予定よりも大幅に遅れてしまい当初予定した決算発表までたどり着くことがでず、企業としての１年間のサイクルを実感することができなかった。活動の年間計画を見直していく必要がある。

●子ども一人一人がより主体的に様々な活動に取り組めるようにしていくためには、日々の授業の中で子ども主体の学習を成立させていく必要があると考える。今年度の活動を踏まえ、キャリア教育の在り方を教育活動全体を見つめながらを検討していきたい。

表－２　令和５年度県学習状況調査５年児童質問紙より（%）

地域のためになる活動を進んで取り組みたいと思う					
	浅舞小学校		県平均		「肯定的」の県平均との差
	肯定的	否定的	肯定的	否定的	
Ｒ４	94.6	5.4	91.2	8.8	+3.4
Ｒ５	97.1	2.9	89.4	10.6	+7.7

普段の生活や社会に出たときに役立つよう、勉強したい					
	浅舞小学校		県平均		「肯定的」の県平均との差
	肯定的	否定的	肯定的	否定的	
Ｒ４	97.3	2.7	94.6	5.4	+2.7
Ｒ５	100	0	94.4	5.6	+5.6

表－１　　**令和５年度　ひまわりプロジェクト　関連教科**

	４月	５月	６月	７月	９月	１０月	１１月	１２月	１月	２月
国語	２年「春がいっぱい」「ふきのとう」	２年「たんぽぽのちえ」	１年「ひまわり」の本の読み聞かせ	２年「夏がいっぱい」 ２年「夏の俳句」 ３年「夏のくらし」 ４年「夏の楽しみ」 ５．６年「季節の言葉」	５年「ひまわりの短歌、俳句、詩」	２年「秋がいっぱい」			５年「伝える表現を選ぼう（手紙）」	
算数			２年「100より大きい数をしらべよう」	６年「比」種の数を比を使って求める。		６年「およその面積」	３年「重さをはかってあらわそう」		２年「1000より大きい数をしらべよう」 ４年「広さの表し方を考えよう」	
理科		５年「植物の成長」→ ３年「たねをまこう」		３年「花がさいたよ」 ４年「暑くなると」	→ ３年「実ができたよ」→					
図工					全学年「ひまわりの絵を描こう」	２年「しぜんからのおくりもの」			４年「ほって表す不思議な花」	
ひまわりプロジェクト		種まき	散水　観察会 除草		絵画コンクール 収穫	種取り		ひまわり集会		ひまわり油、ひまわりグッズ販売
家庭生活		１年「あさがお」「ひまわり」の種まき	２年「芽や苗を比べる」	１年「あさがお」「ひまわり」の観察 ５年「ひまわり油を使った調理実習」	１・２年「収穫した種の観察」					
音楽					５年「ひまわりの歌」					
学活							５年「学習発表会」			
道徳		５年「地域とのつながり」	２年「しぜんのいのち」自然愛護		２年「ぴよちゃんとひまわり」	４年「自然に心を通わせ親しむ」	２年「ごめんね、みなみ」 ３年「わたしの大切な町」			